三納小中学校
校長室便り

手をつなごう

令和５年９月２６日（火）
第 8 号
文責　校長　鮫島　良樹

原風景

私は旅行が好きです。と言っても、海外には一度も行ったことはありません。お金も暇もないので、せいぜい1泊、長くて２～3泊の近場の小旅行専門です。行ったことも見たこともない土地の風景や人々の暮らし、歴史や文化等に触れるのが大好きです。予めプランを立てるのは苦手で、たまたま見たり嗅ぎつけたりして出会えたものを楽しんでいます。（しっかり下調べをしておけば、もれなく楽しめる）という考えもあるでしょうが、お膳立ては面倒だし、期待外れより偶然出会えた喜びを味わいたいと考えています。

さて、旅行をしたいという欲求の中に、私には「無意識に追い求めているもの」があると自覚しています。それは「失われてしまった風景」、私の記憶の奥底に眠る「原風景」との再会です。

一軒家で鍵っ子だった私の幼い頃の遊び相手は、自宅の周りに広がる豊かな自然でした。小川や田んぼ、里山が間近にあり、退屈な私を好奇心いっぱいの少年に育ててくれました。家の中に入ってくる蛍、田んぼに産み付けられた無数の蛙の卵、水路を泳ぐドジョウやサンショウウオなどいろいろな生き物が棲んでいました。また、桑の実、椎の実、菱の実、ワラビにゼンマイと、四季折々に採れる恵みがあり、里山は宝石箱のようでした。ふんだんな自然が私を決して飽きさせることなく受け止めてくれていました。子どもの特権であるもて余すほどの時間を、自然は、遊びの時間に変えてくれました。

しかし、故郷である宮崎市清武町加納地区は、繁華街に近いという好立地であることから、瞬く間に開発が進みました。そして、私を育んでくれた自然を跡形もなく奪っていってしまいました。

心の拠り所

中学校から部活動に入った私。自転車が手に入って行動範囲が広がりました。友達や勉強・部活動に割く時間が増え、興味の世界も変わっていきました。開発によって、日に日に失われていく自然の風景を見て、少し寂しさはありましたが、感傷に浸ることはありませんでした。振り返ることよりも、未来そして世界を広げていくことに目を向けるのが若者ですから。

高校に入り、大学進学を考える頃には、恵みや癒やしをもたらす自然よりも、華やかでクリエイティブな都会の暮らしに憧れていきました。そして、ドキドキわくわくしながら埼玉の大学に進学したのでありました。

【“お母さんは、故郷です”って歌が昔ありました。】

大学1年目は学生寮に入りました。学生運動の幹部生が二人も同室だったため、接触を避けるべく部活動に入りました。2年目からは寮を出て、アパート暮らしを始めました。憧れの都会暮らしについては、先立つものもなし、特に自分から入ってみたかった世界もなし、1年も経たずにもて余すようになりました。むしろ、都会に行ったのに地元生の部活の仲間と、自然を求めて長野県や群馬県などの遠方に足を運んでばかりいました。「都会は…、都会の人は…」と負け犬の遠吠えのような思考も盛んにしていたように覚えています。この頃から、ホームシックと重なったのか、自然豊かな田舎暮らしの良さに目が向いていったように思います。自分の心の拠り所は、幼い頃に私をしっかりと受け止めてくれたあの原風景なのだと。

一抹の寂しさ

個々の価値観や暮らしが尊重されるようになってから、社会教育や地域の教育力の衰退が始まったと言われます。

私も幼い頃、上加納地区は公民館活動や地域行事が盛んでしたから、子ども同士はもちろん、地域のいろいろな世代の人と様々に関わっていたように記憶しています。今思えば、夕方毎日のようにソフトボールや相撲を教えてくれていたおじさん達は、仕事はどうしていたのだろう？行事の準備や運営に携わりながら子どもの世話をしてくれていたおじさん、おばさん達はさぞ忙しかっただろうなあと、頭が下がる思いです。

残念ながら、今では、公民館活動も地域の行事も下火となってしまいました。私達の世代がバトンの受け渡しをうまくできなかったのが原因なのか、そもそも人と人とのつながりが希薄になってしまったことに起因するのか分かりませんが、子ども達を育てる環境としては、昔の方が遥かに優れていたと思います。高齢者が増えたとはいえ、便利な地区ですから移住者が多く、人口はそこそこいるのに不思議な話です。住民の顔と名前がほとんど分かっていた昔とは大違い。自然も失われてしまったので、（違う町に住んでいるようだ…）という感情も沸いてくる始末です。

【サプライズ競技で見られたお父さんたちの心意気】

三納は、私にとって、原風景そのものが存在しています。赴任できて本当に嬉しく思っています。だから、古き良き時代のふるさと加納とだぶらせて見る自分がいます。

ふるさと三納で学ぶもの、遺すもの

９月１７日保護者の方、地域の方の多大なご協力、ご声援に支えられて運動会を開催しました。私たちの根底には、子どもたちの「全力で取り組む学習機会」をしっかり保証してあげたいという気持ちがありました。そのため、熱中症対策をはじめできる限りリスクを排除しようと、先生たちは、平常から、最大限の努力、献身的な取組で子どもたちをフォローし続けてくれました。手前味噌ですが、最高の運動会ができたと自負しております。開会式で感動的な挨拶をしてくれた生徒会長の美言さんは「繋ぐ、繋がることの意義」を語ってくれました。こんな眩しいほどの輝きを放つ子どもたちに、私たちは、素敵な未来、価値ある社会を遺してあげたいと改めて感じ、身を引き締め直したところです。

多様化、グローバル化、ＳＤＧｓ…と、世間ではいかにも先進的で有益な考え方、取組のように取り沙汰されていますが、私たちは言葉に踊らされていないでしょうか？自分の利権を守るために都合よく使っている部分はないでしょうか？

多様性（ダイバーシティ）とは、「あらゆる個性を丸ごと受け止め、尊重し、共生する。」という意味があります。コロナによって閉塞感や不安感が増した状況はありますが、世の中は今後も確実に変動を続けます。（人材不足解消のため、外国人の方はますます増えます。物価高騰も続き、そもそも有り余るほどあった、選べるほどあった「もの」が減少します。）

丸ごと受け止められるか。利権ではなく慈悲の心を優先できるか。「大人はずるい」と言うピュアな心にしっかり向き合いつつ、故郷で何を学ばせ、故郷に何を遺していくのか真剣に考える大きな転換点に来ているようです。加納地区は多くのものを失いました。でも、逆に、新たなものを生み出せるチャンスが来ているのかもしれません。